第２章　マレー半島
～タイ マレーシア シンガポール～

この旅行の後、私はアジアの魅力にとりつかれる。

2.1　微笑みの国

卒業旅行である。2 月 25 日から、私にとっては 2 度目の海外である東南アジアへの旅に出発した。メンバーは自分と亮（りょう）、生沼（おいぬま）、山口、小崎（おざき）、真下（ましも）の 6 人。初めての成田空港からノースウエスト航空（NW）27 便で、タイのバンコクへ飛んだ。

夜、ドン・ムアン空港に到着した私たちは、タクシーで宿へ向かった。さっそくクラクションの嵐。激しい運転。これがタイか。バンコクでの宿は、すでに日本で予約してあったスリウォン・ロード（Suriwong Rd.）にあるマノーラホテル（Manohra Hotel）。2 部屋に 3 人ずつ泊まることになった。

バンコクは思ったよりも随分と都会だった。しかしそれは外国人の力によって作られている感じがした。これこそタイだと感じさせられたのは、屋台の飯、ムエタイ、ポン引き、そしてアユタヤの遺跡である。タイで最初に食べたのは、Hua Lam Phong 駅近くの屋台でおばちゃんが作っていたチャーハンである。値段は 15 バーツ（約 60 円）。これはタイの滞在最終日にもう一度食べに言った程、忘れられないものだった。タイにいる間いろいろな料理を試したが、あのチャーハンに勝るものには出会わなかった。どんな味なんだと聞かれても言葉で説明できない。とにかく日本では食べたことがない味なのだ。見た目は、でっかいキュウリをスライスした様なものが添えられている以外は、特に変わったものは入っていない。おそらく調味料が違うのだろう。

バンコクではよくタクシーでボられた。あれがしょっちゅう続くと、人を信用できなくなってしまう。でも、そういう目に会うと「タイだな」と変な納得と、東南アジアのあやしさを味わったような、ちょっと面白い気分になったりもした。

観光は、時にはタクシー、時にはトゥクトゥク、時には歩きで、王宮周辺や川やマーケットなど代表的なところを 6 人でひととおり見てまわった。どこへ行っても仏像は金ピカであり、仏教と言っても日本とは違う文化であるというのが強く感じられた。仏像の顔も日本のものとは随分違っていて面白かった。

バンコク観光での最高の贅沢は、800 バーツのリングサイド席でムエタイを観戦したことだ。あれはタイへ行ったら必ず見るべきだと思った。だがやはり料金の高い席だけあって、リングサイド席に座っているのは日本人ばかりであった。

タイのムエタイ 1995年2月27日(月)

ムエタイを見ずにタイは語れない。今日はリングサイドでムエタイを見た。面白いという表現は合わない。そこには闘う人の人生が見える。初めの踊りは実際に見ると真剣な表情で、とてもおごそかに見え、タイの歴史が感じられた。また、選手は強い人ほど常に冷静な心で闘っているように見えた。

観客は嫌いになった。人生をかけている人を気楽に見られる気分ではなかったし、自分もその中の一人だと思うととても嫌だった。あれは気楽に、笑ったりしながら見るものではない。歴史があるから、有名だから神聖なのではなく、人が人生の全てをかけている場だからこそ神聖になるのだ。世界には様々な人生がある。彼らの見ている世界はどれくらいの広さなのだろうか。賭けをして騒いでいる観客はとても狭い世界に生きている。瞬間、一緒に観戦している友人達が友人でないような気がした。私はとてもあの様な気分で見ることはできない。

闘っていた選手達は私に生きる活力を与えてくれた。自分に怠け心が出て来たとき、私はきっと彼らの闘う姿を思い出すだろう。私はまた少し、自分の世界が広がったような気がする。人によって日常見ている世界が違うということ、世界には様々な人生があるということを知った。

スタジアムの帰りには小崎と2人で屋台で飯を食った。その後も、歩いていて見かけたチマキを買ってみたりして、屋台の雰囲気を存分に楽しんだ。だが、あの何のラベルも貼ってないビンに詰めて売っている飲み物はなんだろう。とても気になったのだが、2人とも飲んでみる勇気はなかった。

タイでは他にも、道でみかけたいろいろなものを食べてみた。おいしそうなものがいっぱいあるので、飯時でなくても、ついつい立ち止まってしまうのだった。この屋台の飯こそ、アジアの旅の醍醐味ではないだろうか。ハズレということがないのだ。ホテルでの食事には特に感動はなかったが、屋台では何を食べてもおいしかった。

しかしタイで最も心に残っているのはアユタヤである。バンコクを東京にたとえるなら、アユタヤはタイの京都であろう。永く力強いタイの歴史を感じさせてくれる場所だ。バンコクのような騒がしさもなく、子供たちがとてもいい表情をしていた。廃虚となった遺跡も、修復されたものも、静けさと美しさに取り囲まれており、仏に祈る人々の姿も印象的だった。特に修復が進んでいるワット・ヤイチャイ・モンコルは壮大であり、今まで見た名所旧跡の中でも最も大きな感動があった。バンコクのタクシーでボられたことなど吹き飛んでしまい、

「タイっていい国だなあ。」

と思ってしまう程だった。バンコクでのくさくさした気分もアユタヤで癒(いや)すことができた。

タイの後にマレーシアとシンガポールへ行ったが、タイが一番面白かった。もう一度行きたいと思う国だ。

2.2　ペナンでダウン

結局バンコクのマノーラホテルには 5 泊し、3 月 2 日、次は国際列車でマレーシアへ向かった。この列車は天井に扇風機が回っており、窓を全開で走る夜行で、マレーシアの Butterworth まで約 20 時間かかった。快適とは言いがたいものだったが、まさに『世界の車窓から』という気分の列車の旅だった。しかし夜に腹を冷やして下痢をしてしまい、何度もトイレへ行った。亮が買ったトイレットペーパーを私がほとんど使ってしまった。出入国の手続きもとてもつらかった。頭の中はずっと《トイレ、トイレ、トイレ …》。到着した時にはすっかりフラフラになっていた。

その時、タイでは何でもかまわずに食べていたので、6 人の中に「コレラか？」という心配も湧き起こり、少々怖くなった。とにかく宿に着いて横になりたいという気持ちが強かったので頑張って足を進めた。しかしなんと運の悪いことか、その日はイスラムの休日。店は全て閉まっていて、両替所も休み。なんとか通りすがりのおじさんを通じて、ある店でペナン島へのフェリー代に足るだけの換金をしてもらい、島へ渡った。

宿はそれから探すことにしていたのだが、その時期は日本の正月のようなものだそうで、マレーシアの人達が休みでみんなペナンへどっとやって来ているのだった。そのため観光地の宿はどこもいっぱいで、島の中心地であるジョージタウンはどこも閉まっていて、人の姿はほとんどなかった。そして自分は下痢でフラフラ。そのうち吐き気もしてきて体はだるくなり、とうとう道ばたに寝転んでしまった。

その後、友人たちはもちろん、数々の島の人たちの親切のおかげで宿も見つかり、医者に診てもらい、注射を打ってもらって、コレラじゃないとわかって安心し、ぐっすりと眠ることができた。本当に一時はどうなることかと思った。この最初の宿は売春宿だったそうだ。私は完全にダウンしていたので何も気づかなかったのだが、他のメンバーはちょっとあやしい雰囲気を体験したのだと後日話してくれた。

次の日はこの旅行で最も思い出深い宿となった、バツーフェリンギの弁慶民宿（Beng Keit Guest House）に宿を移した。面白い親父と親切なおかみさん、そして旅行者たちとの語らい。そこには 4 泊し、ペナンの海で思いっきり遊んだ。

ある夜、近くの別のゲストハウスでギターで歌っている人たちがいたので、なんとなく誘われて入っていき、テーブルについてみた。彼らの中は我々日本人が来たのを喜んでくれる人と、ちょっと邪魔者扱いする雰囲気の人とに分かれた。最初はギターのおじさんが日本の歌や我々が知っていそうな英語の歌を一緒に歌ってくれたりして楽しかったのだが、そのうち彼らの中で喧嘩が始まった。明らかに原因は私たちだ。せっかくの楽しいひとときがそんな雰囲気になってしまってとても残念だったが、去らなければならないと思った。心の中はちょっと複雑な思いであった。

「俺たちは常に歓迎されてる訳ではないんだな …」

6 人はその場を後にした。

ペナンで夕食に入ったレストランは大体いつもちょっと高めだった。宿は安いところに泊まっていたが、夕飯はちょっと贅沢。どのレストランでもメニューには載ってないが、チャイニーズティーあるかと聞いたら、いつも必ずあった。それがうまかった。

ただ１つ心残りなのは、腹の調子が良くなるまで消化の良いものしか食べられず、お気に入りの飯屋であった Andrew's Cafe のカレーとフレッシュジュースを味わえなかったことだ。この店は高くない。朝と昼はここを利用することが多かった。カレーは大きな葉っぱの上にご飯とカレーを盛って、手で食べる方式だ。みんながうまそうに食べているのを見ながら、私だけ消化の良さそうな麺入りスープや雑炊をしつこいぐらい噛んで食べた。でもさすがインド人の店だけあって、紅茶はどこで飲んだものよりもうまかった。朝食メニューのロティも最高だった。ただそれだけは味わうことができた。だからマレーシアンというのがどんな味なのか、自分は十分味わってこなかったことになる。

ペナンはビーチリゾートである。滞在中は毎日ビーチで豪遊したり、バスを乗り継いでペナン・ヒルやジョージタウンを観光したりして、とても楽しい時間を過ごした。ペナンだけしか見ていなくてこんなこと言うのも何だが、マレーシアは過ごしやすいところだ。ここなら住めそうな気がする。

2.3　世界三大がっかり

名残惜しいペナンを出てシンガポールへ。3 月 8 日、ペナンのジョージタウンから出る夜行バスに乗って次の目的地へ向かった。このバスには約 14 時間乗っていたのだが、乗ってからすぐ照明が消されたので本を読むこともできず、凄まじく揺れ、さらに凄まじい冷房が体を襲い、ほとんど眠れなかった。あの冷房は本当に寒かった。現地の人たちも真冬のような格好をしており、いったい何であんなに冷房を効かせているのかわからなかった。冷房対策をしていないのは我々だけだ。バスの中にトイレは無く、途中何度か休憩のために止まった。そこで食事をとっている人もいたようだが、何分ぐらい止まっているのかわからないのでトイレに素早く行って戻って来るだけにした。

シンガポールに入って最初に思ったのは、街がとてもきれいだということだった。クリーン＆グリーン政策で、ゴミは落ちておらず道は整備されていて、鮮やかな緑の木々には迫力があった。宿はペナンの弁慶のおかみさんに紹介してもらった Lee Travelers' Club というゲストハウスに決めていたので、探す手間は省けた。

シンガポールはとてもきれいな国だが、現地の人々の暮らしは見えてこない。まさに都会である。そして Duty Free Shop の中は日本人ばかりで、ただ買物をしに旅行に来ているような団体だらけだった。その他の店でも変な日本語を話す店員がいたりして、日本人てなんだろうと思った。

だが、インド人街やアラブストリートは面白かった。街の雰囲気がガラリと変わるのだ。ガラクタ市やサリーの店やヒンドゥー寺院。多民族の国であることを実感する。街の雰囲気を肌に感じながらゆっくり歩きたい。でも他のメンバー、歩くの速すぎ。

世界 3 大がっかりのひとつ、マーライオンは思った通りがっかりさせられた。なぜあんなものが世界的に有名なのだろう。最初に目にしたときは、ちょっと笑ってしまった。わざわざ見に行く程のものでもない。シンガポールは今回の旅行で一番つまらなかった。やはり、海外旅行へ行くのは現地の人々の暮らしが感じられる国が良い。都会、特に観光地

化されて、日本人の買物ツアーがうじゃうじゃいる所はあまり好きではない。でもヤオハンは便利だったな。歩き回った後は、必ずそこでほっと一息ついた。

夜は屋台の集まっているところへ行き、ビールで乾杯。いろいろな屋台が並んでいて、どれにしようか迷う。うまい飯とビール。最高だ。シンガポールも屋台の飯はうまい。

最後の日はラッフルズホテルのバーでシンガポールスリングを飲んだりもした。ここのオリジナルカクテルだ。やっぱりこれは飲んどかなきゃと思ったが、よく考えたら日本で飲んだことないから違いはわからないや。ラッフルズホテルは、とても私たちが泊まれる値段ではないが、バーやカフェは宿泊客でなくても利用できるのがうれしい。庭のベンチに座ってくつろいだりして、ちょっとだけ豪華な気分を味わわせてもらった。

シンガポールのチャンギ空港で一夜を明かした後、3 月 11 日、ノースウエスト 8 便で真っ黒に日焼けした我々6 人は、元気に … とは言いがたいが日本に帰ってきた。この 2 週間の旅行はあっという間だった。帰ってきたとたんに寒さを感じ、思ったとおり風邪をひいてしまった。

この旅は私にとって教師であった。東南アジアの魅力を見せてもらった。陸路移動の面白さを感じた。そしてゲストハウス、地球の歩き方、値段交渉、バックパッカー、現地での情報交換、身振り手振りでの会話などなど、個人旅行において必要な、今まで知らなかった知識をたくさん教えてもらった。一緒に旅した仲間、旅先で出会った人々も私にとっては教師であった。東南アジアはとても面白い場所だ。前回の旅の影響で、これまでは外国と言えばまず太平洋地域を思い浮かべていた。私の目は、これから東南アジアへ向くであろう。

そして何よりも、初めて出会った屋台で食べる飯の味とあの楽しい雰囲気が忘れられないのである。うーん、また食べたい！